

## 「俳句の小径」の高浜虚子と再び正岡子規 ～卒業生へのエール～

校長 玉井 啓二

本校の正門のすぐ西側に位置する「俳句の小径」には、垣生に縁のある村上霽月や石田波郷をはじめ、松山が輩出した有名な俳人の代表的な俳句を記した句碑が設置されています。それらの中に、卒業生に送るのにふさわしい高浜虚子と正岡子規の俳句があります。

## 春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子

高浜虚子は、明治7年（1874年）2月22日、松山市長町新丁（現、松山市湊町）に生まれました。本名は清。幼少時には風早郡別府村（現、北条西の下）に住んでいましたが、後に玉川町（現・一番町）に転居し、祖母の高浜家を継ぎました。明治28年（1895年）には、同郷の正岡子規から後継者となることを求められましたが、それを断っています。そして、明治31年（1898年）、柳原極堂の「ほとゝぎす」を引き継ぎ、発行人となりました。虚子は、一時小説家を志し、俳壇から遠ざかっていました。その間の俳壇の主流は、川東碧梧桐を中心とする新傾向俳句でした。しかし、これに異を唱えて、39歳で俳壇復帰を決めました。

この俳句は、大正2年（1913年）、東京芝浦の三田俳句会で詠まれました。俳壇復帰を宣言するような、虚子の決意がみなぎっている俳句です。季語は「春風」。「春の風」ですから、文字どおり「春」の季語です。読み方は「はるかぜ」ではなく「しゅんぷう」とする方が、その後の「闘志いだきて」という語に表れる虚子の強い意志とよく呼応すると言われています。俳句の意味は、「将来に向かって闘志を沸き立たせ、丘の上に立った。この闘志を後押しするかのよう、春の風が吹いてきた。」といったところでしょうか。

卒業生の皆さんは、中学校という次のステージの前に立っています。この虚子の俳句のように、新たな風である春風を感じながら、闘志を抱いて中学校生活に向かって行ってください。

## 若鮎の二手になりて上りけり 正岡子規

正岡子規は、近代の俳句や文学に多大な影響を及ぼした偉人です。本校の「俳句の小径」には子規の句碑が二基設置されており、そのうちの一基については9月3日号で紹介しました。その時に触れられなかった子規のプロフィールを簡単に紹介します。子規は、慶応3年（1867年）9月17日（新暦10月14日）、温泉郡藤原新町（現、松山市花園町）に生まれました。本名は常規。明治16年（1883年）に上京し、共立学校に入学しました。明治22年（1889年）に喀血し、その頃から「子規」と号すようになります。明治23年（1890年）に帝国大学文科大学哲学科に入学し、後に国文科へ移りましたが、明治25年（1892年）に大学を中退して日本新聞社に入社します。明治28年（1895年）、日清戦争に記者として従軍しますが、帰国の船中で喀血し、松山へ一時帰郷します。その時、夏目漱石の下宿で50日余り仮住まいをして静養しています。その間、地元の「松風会」のメンバーらと連日のように句会を開催していました。そして、明治35年（1902年）9月19日に亡くなるまで、病床でも俳句を作り続けます。

この俳句の季語は「若鮎」。春の季語です。子規は、中学時代からの友人に会うために何度か出合橋を渡っています。この俳句に表れているのは、その時の若鮎が重信川と石手川に分かれて上っている情景でしょう。下五ははじめ「流れけり」だったそうですが、後に「上りけり」に改められています。両者を比較すると、「上りけり」とすることで、前進する意思が感じられるようになったと思います。

この句に詠まれている若鮎は、その名のとおりに、若さに満ちあふれた元気な魚です。卒業生の皆さんは、これから様々な道に分かれて進むこととなりますが、この子規の俳句にある若鮎のように、たとえ逆境にあっても勢い良く元気に前へ進んで行ってください。私たちは、卒業生の皆さんをいつまでも応援しています。

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のこころ旅 吟行ナビえひめ

